

[新収日本地震史料より]  
瓜生島の伝説

首藤 伸夫\*

1. はじめに

瓜生島に関する記事は、新収日本地震史料第 2 巻の 1 頁から 58 頁までを占めている。慶長元年閏 7 月 12 日 (1592 年 9 月 4 日) の地震で無くなったと云う、大分県別府湾の島の話である。

この島については、大分大学教育学部内に「瓜生島」調査会が置かれ、昭和 52 年に「沈んだ島 別府湾・瓜生島の謎」(文献 1) という 301 頁の本を刊行している。

これらを元にしながらい、瓜生島に関わる伝説を見ることとする。

2. 瓜生島の地図

豊陽古事談付図と幸松家所蔵の地図がある。豊陽古事談とは、「寛文年代 (1670 年頃) に誰か (作者不明) が編纂したものであったが、百年後、府内高屋氏宅の庫中から偶然発見され、これを高屋氏が書写して秘蔵していた。さらに、この写本を宝暦年間、故あって麻田某が手に入れ所蔵することになった」ものだという。宝暦 10 年 (1760 年) の事である。それに載っている地図が図 1 である。

もう一つの地図が図 2 であり、瓜生島の島長であった幸松家に伝わったものと云われる。図 1 との大きな違いは、は島であった久光島が陸続きの半島になっていることである。

この両図の詳しい比較は文献 2 に見られる。

今村明恒が幸松家地図を元に作ったと云われるものが図 3 である (文献 3)。



図 1 豊陽古事談の瓜生島図 (文献 2)。活字の地名は筆者加筆



図 2 幸松家所蔵の地図 (文献 2)

これらには瓜生島が描かれているが、そもそもこの島は存在したのであろうか。

アジア水中考古学研究所 (文献 4) は、次の様に云っている。

「(9) 沈島伝説とその調査

別府市瓜生島

風邪光明媚な温泉地として知られる九州最大の観光地大分県別府市は、その眼前に国東

\*東北大学名誉教授

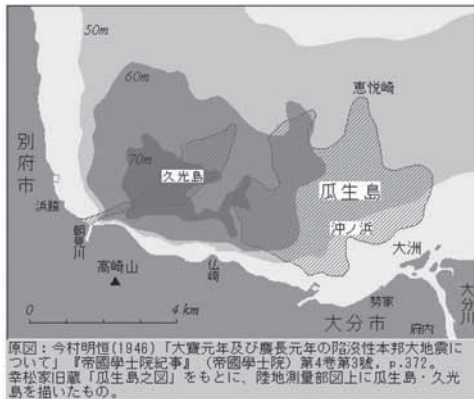


図 3

半島と佐賀関半島に囲まれた別府湾が広がる。この湾内には現在島影を見ないが、伝承によれば東西3.9km, 南北2.3kmにおよぶ『瓜生島』(別名を建部島あるいは沖の浜島)が存在したといい、慶長元年(1596年)閏7月12日午後2時過ぎ、出国高知沖の海底を震源とする大地震(伏見大地震)によって、住民もろとも海没したと伝えている。

瓜生島は、室町時代頃から豊後最大の貿易港として隆盛を極め、12ヶ村数千戸を有し、島の中心部分には三条の大通りが走っていたと伝える。豊後府内藩の藩士であった戸倉貞別が元禄12年に著した郷土誌『豊府聞書』にもその名を見ることができる。

昭和41年、この伝承の島を求めて潜水艇による調査が、昭和52年には『瓜生島調査会』の二度にわたる海底調査が実施され、遺物や島の存在こそ発見できなかったものの、海底下地層の音響測深調査の結果、沖合750mから2kmにおよぶ扇形の地滑りを観測し、別府湾を走る活断層とほぼ平行することを確認した。今後、幻の島の探索が現実のものとなる可能性も高い。」

なお、久光島は、この時ではなく慶長3年7月29日の大地震で沈んだとの説もある。(文献1, p.65)

### 3. 神助伝説

#### 3-1 島長 幸松丹次郎勝忠

「慶長元年(1596年)7月3日に地震があった。16日17日にも地震。更に23日から28日まで地震があり、1日に5回から10回も揺れた。用心深い人46人ばかり島を立ち退いて荏隈村に仮小屋を建てて住む。閏7月になっても4日5日と地震があり、逃げ去る人が非常に多かった。閏7月11日午後2時頃より大小の地震が続き、翌日12日には豊後国の高崎山・木綿山(註:由布山か?)・鶴見山・霊山など悉く山崩れし、川は溢れ……

人々は恐れおののき、走り回る。書き表す事も出来ないほどの混乱である。特に瓜生島の事は人々の嘆きの声が大空に満ちるほどの出来事である。しかし12日午後4時頃地震がしばらく収まった。瓜生島では勿論のこと、別府浜脇に至るまで大いに喜び、水浴する人、食事をする人、食事をしない人と様々であったが、その時海中で大音響がした。大変なことだと人々が駆け回る大騒ぎとなった。

この時、一人の老翁が白馬に乗り、鞭を上げ、『この島が今崩れるぞ。早く浜に舟を寄せ、逃げ去るべし』と大声で叫びながら、島中を駆け回った。

島長の幸松丹次郎勝忠は、この老翁の言葉により、甥の幸松左門丸信重を連れ、馬に乗って『今、明神様のお告げがあった。早く立ち退け。遅くすると神様のお告げに背く罪になるぞ』と島中を走りまわった。島の人々は大慌てで、若者は年寄りを助け、親は子を助け、それぞれ小舟に乗って逃げようと大混雑となった。

村の井戸は全て水がなくなり、海も干上がり深さ10mくらいの岩や砂が現れた。そして又東に百雷の落ちるような轟音がし、たちまち海に大波が起り、府内や近辺の村々に何度も大波が来襲した。

この時、幸松丹次郎勝忠は小舟に乗って、『左門丸信重は何処に居るか』と呼ばわったが、『此処です』と手を出したので、勝忠が

信重の右手を握ったが、大波が来て何処へ行くのか判らず、只呆然と波任せにしながらも信重の手を握って離さないで居た。左門丸信重は両足を波の上に出したまま漂流するのであった。その時、大空に声がした。『勝忠、手を出せ』。

勝忠が目を開けてみれば、老翁が長さ3m許りの竹を出し、『これを持って』という。勝忠、喜んで左手にこの竹を持ち、右手には信重の腕を握っていたら、暫くして山の端に舟が着いた。老翁はと見ると、老翁はもう居らず、あるのは山ばかりであった。

勝忠はやっと人心地つき、『誠に神明の御陰で命が助かった』と思い、信重を見ると息絶えたか答えない。周章でて信重を抱き起こし、頻りに声をかけると、やっと夢から覚めたかの様に生き返った。雨が車軸を流すほどの大降り、二人とも松の樹の上に居た。降りてみると、そこは加似倉山であった。そのうえ、有難いことにこの山を始め、大宝山・大平山を見ると、数百の灯籠が撞いていた。その全部には由原宮善神王宮と記された御神燈であった。誰が建てたのであろうかと不思議に思った。勝忠・信重は加似倉山で世を明かしたが、暁になると此らの御神燈は消えてしまった。誠に由原宮加来善神王宮の御加護と有難く伏し拝んだ。……勝忠、信重が慶長元年閏7月13日朝、加似倉山から呆然と海を眺めると、何代も住み慣れた瓜生島の12の村は跡形もなく、只海があるだけ、実に夢か現実か、あまりの大変化に涙も出ずに居るところへ、大分郡浄土寺四世の住職馨誉上人がお出でになり、『取り敢えず我が寺にお出でなさい』と云ってくれたので、丹次郎勝忠・多門丸信重の二人は浄土寺に寓居したのであった。(瓜生嶋崩の由来) (新収第2巻, pp.42-43)。

「加似倉山 (JR 西大分駅南側の山か)」(文献2, p.23) と云われるが、西大分というのは図1の生石付近である。

この話では、警告と救助が神の助けとなっている。

### 3-2 船奉行 柴山勘兵衛重成

これに似た話が柴山勘兵衛記である。

主役は、船奉行であった柴山勘兵衛重成(文献1, p.152) とその内室の二人である。

「同閏七月五日ニ、重成内室、始テ平産有リ。同九日大地震シテ、沖浜ノ浦ヨリ潮ヲビタダシクセキ上、大波立テ、両賀ノ屋敷海中ト成ル。重成イソギ家ノ系図ト度々ノ感状ノ入タル挾箱ト持鑰バカリヲ取出シテ、内室トタダ二人、家ノ屋根ヲ脇差ニテ切ヤブリ、二人共ニ屋根ノ上ニ居テ有リケル所ニ、七尋バカリ有ル舟板、家ノ上ニ流レカトリタリ。是ヲ幸ノ事ト思ヒテ、二人共ニ乗テ有ケルバ、引潮ニ沖ニ引出サレテ、危キ事度々有リ。暫ク有リテ、波モ風モ、鎮マルト思フ時ニ、小イサキ船ヲ押シテ来ル者有テ、『此船ニ乗ラセラレ候ヘタスケ申スベシ』ト云ケレバ、二人ナガラウレシクテ、急イデ舟ニ乗リタリ。書物ノ箱ヲモ鎗ヲモ取ノセテ、此者ニタスケラレ行ケルナリ。暫シノ間ニ、今津留ト云所ノ島ニ著ケルニ、此所モ大波ニ崩レテ、人家モ見ヘズナリケル。此所ノ氏神ニ天満宮有リ、二人共ニ爰ニ休居テ、ツカレヲハラシケル。内室ハ産ヲシテ、五日目ノ事ナレバ取分勞レテ有ナル。同十日ニ沖浜ヨリ吉右衛門、与右衛門、九良兵衛ナド、云家頼ノ者共尋テ来ルナリ。「汝等ハ、何トシテ助リタルゾ」ト重成問ヘバ「崩レタル家ニトリ付テ、南ノ山ギハ迄、大波ニ打寄セラレタルニヨリ、則、山ニ上リ申テ候」ト申ス。「残リノ者共ハ如何ニ」ト問ケレバ「大方助リ申テ候」ト云。「女ハ誰々コソ助リタリ。亦タレダレコソ見ヘ候ハズ」ト申ス。「金銀モ武具モ不<sub>レ</sub>失申」ト云。重成先仕合ヨシトテ、其日、沖浜ニ帰リケル。先、カリヤヲ立テ居ルニ、世間ノ体ヲ聞ニ、諸国皆一度ニ大地震セシナリ。扱重成危ク命助リテ、世間モシヅマリテ、小舟ヲ乗リテ来テ助リタル者ヲ尋ルニ、我コソ夫ト云モノナシ。是ハ今鶴村ノ天満天神ノ加護ニテ助リケルトテ、是ヨリ重成天満宮ヲ信仰イタシケルナリ。」(文献1, pp.159-160)。

この話では、救助が神の助けであり、警告はなされていない。

#### 4. 沈没原因に関する伝説

##### 4-1 瓜生島伝説 (文献5)

「現在の別府湾，西大分沖には東西 36 町，南北 21 町の島があり東西に開いていた。島には本町，ウラ町，新町といった街も整備され，農業，漁業，塩釜などおおよそ数千軒の住家があった。寺や神社もあり穏やかな暮らしの島であったが，ある年地震と津波により沈没したと言うのである。

島の蛭子社という神社に『恵比寿像』があってこの恵比寿様の顔が赤く染まると，天変地異が起きると伝えられていた。ある日，島のふらちな若者の一人が，いたずらに恵比寿の顔を赤く塗ってしまった。すると突然地揺れが起き，大津波が襲い島は沈没，多くの住民が死んでしまったと言うのである。・・・・・・・・・・・・・・・・

##### 民話 (1)

前記の民話とは少し異なるが，HP 管理人が小学生のころ聞いた話では，島の神社には狛犬があって，狛犬の目が赤く変わると，地震が起きると云われていた。ある時子供がいたずらに狛犬の目を赤く塗ってしまった。すると地震が発生大津波が来て島が沈没し大勢の人が流されたと云うものである。」

##### 4-2 地震と沈んだ島の伝説 (文献6)

「特に目をひくのは別府湾の地震で、『沈んだ島』の話が伝わっている。それは『瓜生島』という別府湾に浮かぶ島であった。伝説によれば，島は 1000 戸の家や多くの寺社で栄えていたが，古くからの言い伝えがあり，島民は仲良く暮らさねば神仏の怒りを買ひ，その証拠に島の蛭子社の神将の顔が赤くなって島が海に沈むとされていた。ある時，一人の不心得者が神将の顔を赤く塗りつぶしたところ，本当に地震と津波が起きて島は沈み多くの人々が亡くなったという。今日，大分県民なら大抵この話を知っている。もっとも島が実在したかについては諸説あって定かではない。しかし，瓜生島海没を述べた古記録はある。」

##### 4-3 雉城雑誌

「又，此瓜生島モ同時ニ沈没ス。死ヲ免ルル者僅かにニ七分，溺死七百八人，此島ノ古老相伝テ曰，島中西ノ境ニ祭ル処ノ蛭子ノ神，其ヲモテ赤クナル時ハ，此島漂没スト。此日，或無頼ノ悪少年アリテ，面ニ朱丹ヲ彩リ戯レ欺ントス果シテ島民大ニ怪ミ，水害ヲ避ント欲シ東西ニ奔走ス。故ヲ以，溺死スルモノ他ニ比スレバ多カラズト云々。時ニ領主早川長敏助命ノ為島民ニ衣服，及ビ米錢ヲ扶助シ，勢家名ノ内ニ仮屋ヲ建テ住シメ，旧名ニ因テ沖ノ浜町ト号。即チ今ノ町是也。此町ノ外，府中及ビ近邑ニモ，此苗孫尚多ク存在ス。草木子云ヘル海嘯也。

按ニ，島民ノ伝説，愚俗ノ習弊タリト雖，信ヲ起スモノハ，悉ク死ヲ魚腹ニ免ル。此日適，其欺戯ノ符合スルモノ歟。或ハ蛭子大神ノ無頼人ニ託シテ，島民ヲ救ヒ玉ヒケルニヤ。可怪可恐。

按，本朝故事因縁集，薩州野間崎明神ノ条ニ，唐土万里島々仁王ノ像ヲ建テ，末世ニ至リ，仁王ノ而赤ク成ルトキハ島氓プト云伝フ。于時，悪人アリテ，仁王ノ面ヲ朱ニテ染ケレバ，島過半沈デ皆溺死ス云々。是又相似タル説ナリ。」(雉城雑誌，新収第 2 巻，p.21)

##### 4-4 豊後伝説集

「瓜生嶋陥没伝説に就て兎に角周回三里もある島が一朝にして海底に沈没して了ったのであるから，一寸不思議にも感ぜられる訳で，其処に色々と伝説を産むことになる。

それで前述の如く，或は神罰に依るとか，但しは仏堂を島に建てたからだとか，色々に伝へられて居るが，此の島の沈没に就て，最も当地方の人口に膾炙して届るのは次の様な話である。

島には恵比須の社があって，島民の言伝へとして，その神像の顔が赤くなると，島が波間に沈むと伝へられてあった。そして朝夕島民はその社に詣で無事を祈って居た。然るに慶長元年七月或日，一人の島民が，神像の顔の真赤に染まってゐるのを見て，大いに驚き，早速村々に告げて一騒ぎをした。或者は

船を出して本土に遁れ様とし、或者は予言を信じないで、島に留まらうとした。

その時島に住む真斎といふ按摩は、皆の周章で騒ぐのを見て、苦々しく思ひ、『神像の顔の赤くなったのは、俺が紅殻を塗ったからだ』と言ひふらした。島民は半信半疑で去就に迷ってみると、やがて海が騒がしくなり、……一夜の内に全く島は海中に没して完了した。(豊後伝説集)(新収第2巻, p.47)

#### 4-5 石の獅子の目に血が流れる チベット(中国)

「むかし、ある国王が一人の僧を召し抱えていた。その僧は神通力を持ち、多くのことを予言していた。ある日、僧は国王にいった。

『王さま、大変恐ろしい知らせを申し上げます。この城の城下町はもうすぐ洪水で沈んでしまいます。王さまはじめ、民はみな魚のように水底に留まることになりましょう。しかしながらただ一つ、洪水を予知する方法がございます。どうぞ市場の石の獅子を観察するよう毎日人をお使わし下さいませ。もし獅子の目から血が流れたら、それから七日もしないうちに洪水はやって来ましょう』

そう言い終えると、国王がどんなに引き留めても僧は荷物をまとめて旅立ってしまった。

国王は僧の話信じ、毎日自分の三人の娘を順番に市場まで肉を買いに行かせた。その実、石の獅子の目を調べに行かせていたのだ。石の獅子の周りには五人の肉屋がいた。五人は王女さまが自分で肉を買いに来るのをとても不思議に思い、こんな風がいいあった。

『まったく、王さまのところには何百人も召使いがいるだろうにどうして王女さまに肉を買いに来させるのだろうか。これには絶対なにか訳があるぞ』

ある日、一番末の王女さまにこの疑問をぶつけてみた。すると王女さまは周りに人が居ないのを確かめると、石の獅子に血が流れたらどうなるか、ということ正直に話した。

王女さまが行ってしまったあと、五人の肉屋はあれこれ相談した。自分たちだけでこの

秘密をしつかりと抱え込み、ボロ儲けしてやろうと思った。夜、牛の血や羊の血をこっそりと石の獅子の目に塗った。

次の日、一番上の王女さまが肉を買いにやって来て、石の獅子の両目から血がしたたっているのを見た。驚きのあまり、肉をかうどころではなく大慌てで王さまに報せにいった。国王はすぐに大臣を集め、この恐ろしい報せを告げ、王宮の財産をほったらかしにしたまま、国中の人を連れて山の上に逃げ去った。

ただ五人の肉屋だけは心中密かに笑い合った。ちょっと悪智恵を働かせただけで、数え切れないほどの財産と家を手に入れることができた。たくさんの牛や羊をつぶし、大がめの酒を飲み、順番にお互いの家で宴会を開くこと三日。自分たちがたいそう智恵があったおかげで、一夜の間に町一番の大金持ちになったことを祝福した。

五人で宴会を繰り広げ大騒ぎしている、ちょうどそのとき、石の獅子の目から本当に血の涙が流れ出した。しかし肉屋によって塗られた牛や羊の血のおかげで、それに気づくことはなかった。こうして七日後、町は丸ごと水に沈んでしまった。五人の肉屋とその財産は、ザブンザブンと寄せては返す大波に押し流され、どこ行ったのかだれも知らない。」

#### 5. 終わりに

結局、瓜生島が存在したのかどうかは、明確には判らない。物的証拠としては、大規模地滑りが確認されるにかかっている。

同じいたずらにしても、本気にしたものの命が助かり、あれはいたずらとしたものが津波に巻き込まれるなどと、結果は異なるのが興味深い。

#### 引用文献

1. 「瓜生島」調査会：沈んだ島 別府湾・瓜生島の謎, 301 p, 昭和52年。
2. 日名子 健二：瓜生島考, <http://www9>.

- [plala.or.jp/chietaku/uryuu.htm](http://plala.or.jp/chietaku/uryuu.htm)
3. 瓜生島の沈没, 新・地震学セミナーからの学び, <http://www.ailab7.com/uryuu.html>
  4. アジア水中考古学研究所: 日本における水中遺跡調査の歩み (4), [http://www.ariaa.org/archaeology/in\\_japan/steps4/](http://www.ariaa.org/archaeology/in_japan/steps4/)
  5. 瓜生島伝説, <http://www1.bbq.jp/hukobekki/uryuu/uryuu.html>
  6. 東光 博英: 地震と沈んだ島の伝説, <http://www.kufs.ac.jp/toshokan/bibl/bibl193/pdf/19308.pdf>
  7. 日本民話の会・外国民話研究会 編訳: 世界の水の民話, 2章 雨と洪水, 三弥井書店, 平成30年, pp.81-82。